

公表の趣旨

- 金融庁は、ストレス時の対応を含めたリスク管理態勢等を確認し、必要な改善を促すため、2023年後半から、主に地域の金融システム上重要な役割を果たしている地域銀行を対象として、ストレス時の対応を含めた経営・リスク管理態勢とその検証ツールであるストレステストの実施状況についてモニタリングを行ってきた。
- モニタリングを通じて把握した事例とストレス時対応力の強化に向けた金融庁の考え方について、モニタリング対象先以外の金融機関にも参考となるよう、整理・公表するもの。

総論

- 地域銀行においては、金融・経済市場にストレスが生じた場合でも財務の健全性を維持し、質の高い金融仲介機能を継続的に発揮することが求められる。そのためには、経営陣が主導して平時からストレス時においてこそ質の高い金融仲介機能を発揮できる対応方針を明確に定め、経営に反映させる取組が重要である。
- 具体的には、経営陣が主導して、以下の各プロセスを互いに関連付けて実行することが重要である。
 - ① 自行にとって影響の大きい重要なリスクを特定・認識すること
 - ② リスクの顕在化が経営に与える影響を分析すること
 - ③ ストレス時の対応計画（アクションプラン）を前提とした経営戦略・業務計画を策定すること
 - ④ 経営戦略・業務計画を遂行する過程において適時に金融・経済環境の変化を捉えてストレス時の対応策を見直すこと
- 各論における、事例を踏まえた高度化に向けた考え方を参考に自行内の各プロセスを検証するとともに、一連のプロセスが真に実効的なものとなるよう、経営陣がリーダーシップを発揮して、組織全体が各プロセスに関与し、第1線・第2線・第3線が全体として有効に機能するための態勢を整備することが重要である。

モニタリング結果（各論）における事例を踏まえた高度化に向けた考え方

1. 金融仲介機能の継続的発揮に資するリスク管理上の取組

（1）金融・経済環境の変化を捉えたリスク認識

- 自行の経営に大きな影響を与え得るリスク（トップリスク）を特定し、組織全体での認識を共有することが重要。
- 経営陣がリスクを特定する際には、経営陣の視点からだけでなく、顧客営業部門を含めた第1線・第2線の実務担当者の視点によるリスク認識も含めるなど、銀行を取り巻く多様なリスクに対して様々な角度から機動的に検証を重ねることが重要。

（2）経営戦略・業務計画の策定とリスク管理枠組みの高度化

- 経営陣は、経営戦略・業務計画・資本配賦計画を策定・承認する際に、ストレスシナリオを検討するとともに、ストレス時の自己資本比率を目標水準対比で検証すること、また、未配賦資本の十分性を検証することが重要。
- 経営陣は、リスク認識が大きく変化した場合のほか、当初策定・承認時になかったリスクテイクを検討する場合等にも、リスク量全体を経営体力の範囲内に制御できるよう、資本配賦を含むリスク管理枠組みを必要に応じて見直すことが重要。

（3）アクションプランの検討

- 組織全体で平時からストレス時におけるアクションプランを検討し、危機時の具体的な意思決定プロセスや、各対応部署やそれらの連携体制を明確にすることが重要。
- 顧客営業部門とともにストレス時に影響を受ける顧客向け支援を含めたアクションプランを検討することが重要。
- ストレス時に起こり得る様々な事態を想定した上で、自行への影響に応じて複数の選択肢を検討し、優先順位を付けることが重要。

（4）ストレス時対応力の強化に向けた第1線・第2線・第3線の役割

- 経営陣は、組織全体でストレス時の金融仲介機能の維持のために必要な施策やリスク管理について検討を行い、改善につなげる態勢を構築することが重要。
- 第1線から第3線の関連部署が自らの役割を果たすことに加えて、経営陣はそれぞれが全体として有効に機能する態勢を構築することが重要。

モニタリング結果（各論）における事例を踏まえた高度化に向けた考え方

2. 適切なストレステスト（１）ストレステスト実施体制の整備

（ア）経営管理上におけるストレステストの目的・位置付けと実施要領の規程文書化

- ストレステストの目的や位置付けを、単なる定期的なリスク計測の手法ではなく組織全体の経営管理ツールとなるよう、規程等を通じて認識を共有することが重要。
- 属人化防止や内部監査による点検を確実にする観点から、実施要領等の整備も重要。

（イ）リスク分析対象、グループ内対象範囲及び評価軸の設定

- リスク分析対象、グループ内対象範囲のほか、ストレステスト結果を評価する指標及びその目標水準等を定め、経営陣を含め組織全体で認識を共有することが重要。
- 評価指標の目標水準について、銀行の存続可否のために求められる水準にとどまらず、安定的な経営を維持するために必要な水準も設定し、各水準とストレステスト結果との乖離状況を把握することが重要。

（ウ）組織の役割、実施頻度・実施時期及び実施内容の報告体制

- 複数の部署が関与することから、各担当部署の役割と責任を規程に明示し、関連部門との連携体制を整備することが重要。
- ストレステスト実施の具体的な年間スケジュールを明示し、業務計画策定と関連付けて、関係部署との間で計画的に準備や議論を進めることが重要。

（エ）データ・ITインフラの整備と計測手法の更新及び人的リソースの具備

- 事業モデルの発展・複雑化に応じて、ストレステストの基盤となるデータの整備や計測手法の更新を行い、それらを活用できる人材を確保することが重要。
- インフラや人材に関する整備計画については、経営陣が長期的視点をもって関与することが重要。

モニタリング結果（各論）における事例を踏まえた高度化に向けた考え方

2. 適切なストレステスト （2）シナリオの策定

（ア）自行が認識する重要性の高いリスクに基づく複数シナリオの策定

- ストレステストにおいて自行に大きな影響があり、かつ蓋然性のあるシナリオを含む複数のシナリオを策定することが重要。
- ストレスシナリオと関連付けたアクションプランを検討するためには、統合的なシナリオを策定することや自行に大きな影響があり、かつ蓋然性のあるシナリオを策定することが重要。
- シナリオ策定の考え方や背景を経営陣に共有し、妥当性について議論することや、どのような事象や環境変化までをシナリオに勘案済みとするかについて経営陣と認識共有することが重要。

（イ）検証目的・シナリオに整合的な変数等の前提条件及び計測期間の設定

- 毎回同じ変数や変動幅を採用するのではなく、策定したシナリオに基づき、過去の経済指標や外部情報も参考にして、変数等の前提条件を適切に設定することが重要。
- 経営陣と議論の上、ストレステストの目的や銀行の規模・特性に応じた計測期間を設定することが重要。

（ウ）シナリオや変数等の前提条件における組織全体での議論と経営レベルでの検証

- 実効的なシナリオの策定や変数等の前提条件の設定を行うため、関係部署間の緊密な連携を図るとともに、経営陣への報告内容を工夫し、議論を促進することが重要。